

“速効”求めず一貫性を

前項に、「医師の施す治療法が少しも効果をあらわさなくて、逆に、ほっておかれた障害児の方が症状が良くなった」という事実から、ドーマン博士が“ほんとうの治療法”を発見した、というお話を紹介しました。

その発見とは、「歩くことの出来ない障害児を歩けるようにするのに、歩く訓練をするよりも、這うことの方が有効だ」ということでした。歩く能力を養うのに全く無関係と思われる、“這う”ことが、歩く訓練よりも効果があるという事実、これは私たちに重要な問題を投げかけていると思います。

歩く能力をつけるには“歩く訓練”が最も有効な道理です。けれども、どんなに有効な方法でも短時間の実践では効果があらわれない、ということはこの事実は私たちに教えてくれています。

反対に、歩く能力をつけるのに大して効果があるとも思えない“這う”ことが、毎日毎日長時間やっているために、長い間には驚くような素晴らしい結果をもたらす、ということを教えてください。

家庭教育においても、「親が教育熱心で、子供のためにいろいろな配慮をしているのにその子が悪い子になり、その反対に、教育に全く他関心な親の子が立派な子供に育った」という例が、この世の中には決して少なくありません。

このような事実にいくつか接すると、「親がわが子を教育しようなど

と思わないのが良い。ほったらかしておいた方が良い」と思いたくなります。しかし、それは短絡的思考というものです。

親は、教育に大層熱心なように見える人でも、多くは思いつきの行き当たりばったりで一貫性がなく、従って、長期にわたる教育的配慮に欠けています。だから、熱心のようにも教育効果があらわれないわけです。

教育効果があらわれないだけならまだしものこと、反対に子どもを悪くしてしまうというのはどうしたことでしょうか。それは子供がだれでもうちに秘めている、自然なる成長力を無視して、“苗を引っ張る”ような行為をし、速効を求めるからです。

では、教育に無関心な親の子が立派になったということはどういうわけでしょうか。それは、無関心そのものが子供を立派にした原因ではなくて、無関心だったから“苗を引っ張る”ようなことをしなかったこと。それで、そのために子どもの自然なる成長力が十分に発揮され、また、環境がたまたま教育的に整えられていたので立派に育ったのだと思います。

ちょうど畑の作物が、肥えた土の中で、日光と雨とに恵まれさえすれば、手入れを全くしなくても、立派な作物になるのと同じことです。しかし、良い手入れをするなら、もっと立派な作物になるはずですが、わが子にとって、無関心やほったらかしが一番良いことであるはずはありません。たとえ良かったとしても、それは親として恥しいことです。